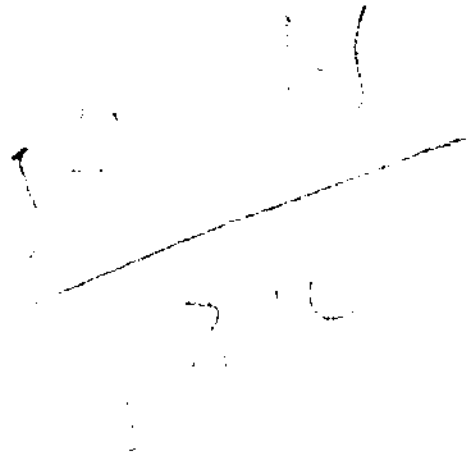
広島―岐阜・殺意の影絵

福

KOSAIDO BLUE BOOKS



広島―岐阜・殺意の影絵

KOSAIDO BLUE BOOKS

著　者　福田　洋

発行者　吉田和之

発行所　廣済堂出版
〒105
東京都港区芝2-23-13
電話　03-453-1201(代)
振替　東京8 164137番

印刷所　株式会社廣済堂

©1990　福田　洋　　Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-05396-2 C0293

広島—岐阜・殺意の影絵

福田 洋

江苏工业学院图书馆
藏书章

KOSAIDO BLUE BOOKS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目　次

一章	女優の秘密	7
二章	広島の死体	29
三章	殺人容疑者	54
四章	東京の殺人	71
五章	死者の足跡	91
六章	失踪した男	106
七章	多治見の女	123
八章	恵那の殺人	143
九章	過去の疑惑	162
十章	解決の切り札	185

一章　女優の秘密

「火野サヤカは、もちろん、ご存知ですね？」
桜井明夫は聞いた。夏川和香は、深くうなずいて答えた。
「日本じゅう、赤ちゃんは別にして、だれでも知ってますわ。おたくの看板タレントでしょう？」
「そのとおりです。サヤカが間もなく、一流スターになるのは間違いないと思います」
桜井は、断定するように言ってから、にこやかに続けた。
「デビューしてから二年ですがね。往年の清純派女優、原節子の再来という声もあるくらいです。お蔭で、今年のスケジュールも満杯です。
ご存知とは思いますが、いま、テレビ日本の連続ドラマ『青春まっさかり』に出ていますし、次は、日東テレビのドラマ『ラブミー・テンダー』に主役が決まっています。それに、来月からは、年末の大河ドラマの撮影に入ります。時代劇ですが、主役クラスのキャスティングです」
ペガサス・プロの応接室だった。社長の桜井は、窓際のソファにかけていた。四十代半ばのがっちりした体を、高価そうなグレイの三ツ揃いの背広でキッチリ包み、メタルフレームの眼鏡をかけている。
いかにも遣り手の少壮事業家といったタイプだ。ペガサス・プロは所属タレント十数名の小さなプロダクションだが、桜井は切れ者で通っている。
ガラステーブルを挟んで、夏川和香が対座していた。和香は、三十歳にはちょっと間があるが、夏川調査事務所のオーナー所長だ。
身長百六十七センチの均整のとれた体に、ベージュのブレザー、紺のフレアースカートがよく似合っている。目鼻立ちのくっきりした顔だが、化粧は口

紅だけで、美貌を意識している感じはまったくない。
桜井は、ちょっと、苦笑して続けた。
「すみません。うちのタレントの自慢話になってしまって。ところで、上野さんの話によると、夏川さんのお父上は、警視庁の警部補さんだったとか……」
「そうなんです。警部補で退職し、その後、夏川調査事務所を始めたんです。父が亡くなったあとを、私が継いだというわけですの」
上野というのは、全国でトップクラスの信用調査機関、東洋興信所の調査第×部長だ。夏川調査事務所は、煙草の吸い殻みたいにどこにでも転がっている、巷の探偵社である。創立者は和香の父で、上野は父の知り合いだ。
東洋興信所の業務は、大手企業の信用調査がメインなのだが、興信所と名乗っているから、やはり、それ以外の調査の依頼もある。そんな時、上野は、信用のおける探偵社がある、と言って、夏川調査事務所に仕事を回してくれていた。
父が亡くなって和香が所長になってからも、上野はその習慣を守ってくれている。今日、桜井を訪ねることになったのも、上野の紹介だった。桜井は、和香が刑事の娘なので、信用がおけると判断して仕事を依頼する気になったようだ。
桜井は、そうですか、とうなずいてから続けた。
「夏川さんにお願いしたいのは、その、サヤカの身元調査なんです」
「喜んでやらせていただきますが……」
和香は、ショート・ボブの頭をかしげて続けた。
「なぜ、いまごろ、サヤカさんの身元調査なんか、なさるんですか？」
その疑問は当然だった。火野サヤカはペガサス・プロの所属タレントである。芸能界は、生き馬の目を抜く世界だ。その業界で、辣腕で知られている抜け目のない桜井が、自分のプロにサヤカを入れる時、身元くらい、確認していないはずはないからだ。
「不審に思われるのは当然です」

桜井は、そう言ってから、あたりをはばかるように声を低めた。

「芸能プロの社長が、所属タレントの身元を知らないわけはないですからね。だが、夏川さんにお願いしようとしてるのは、そんな通り一遍の身元調査ではないんです。これからの話は極秘なんですが……」

桜井の顔は緊張していた。かなり重大な調査らしい。だから、信用絶大な和香を選んだということだろう。桜井は続けた。

「おっしゃるとおり、サヤカは当社の看板タレントで、金の卵です。率直に言って、私はサヤカに、ペガサス・プロの将来を賭けているんです。だから、今後とも、いろんな面で、カネを注ぎ込んでいくつもりなんです。そんな掌中の珠(たま)みたいなタレントなんで、ちょっと、神経質になりすぎているのかもしれませんが、半月ほど前、妙な電話がきましてね」

「妙な電話？」

「そうなんです。男の声でした。サヤカのことで話があるというんで、私が出ますと、その男は、サヤカの過去の秘密を知っている、一度会ってゆっくり話したい、と言うんです。

名前を聞くと、山田だと名乗り、どんな話なのかと聞くと、内容はいま言えないが、重大な秘密だ、それがバレるとサヤカのタレント生命は終わりだ、と言うんですよ。この世界は、複雑怪奇ですからね。

芸能プロをやってますと、時々、そんな脅迫めいた電話や、悪戯(いたずら)電話がかかってきたりするんです。私は、一応、突っ撥ねるつもりで、秘密、秘密と言われても、なんのことかわからない、それを言わない以上、会っても仕方がないだろう、と言ってやりました。

すると、山田と名乗った男は、十日以内に、ネタを持ってお伺いするから、と言って電話を切ってしまったんですよ。それから、十日間以上、待ちました。だが、なんの連絡もない。だから、悪戯かもしれないとは思ったんですが……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

桜井は言葉を切ると、二、三秒、和香の顔を見つめた。
「だが、やはり、不安になりましてね。さっきも言ったように、現在、サヤカのスケジュールは満杯です。正直言って、これまでに注ぎ込んだ投資が、これから回収できる時期にきている矢先です。
そんなところに、妙なアクシデントが起こると大変なんです。それで、調べてみるために、上野さんにあなたを紹介してもらったんです」
「事情はわかりましたが、社長さんは、サヤカさんの身元は当然、よくご存知なんでしょう？」
「それは知ってますよ」
「なにか、世間に知れるとまずいような秘密がございますの？」
桜井は、低く唸っただけだ。和香は続けた。
「そんな秘密などないのなら、いまさら、調査なさることはないでしょう？　費用もバカになりませんし……」
桜井は、にっこりして言った。
「やはり、上野さんの言われたとおりだ。夏川さんは誠実ですね。たいていの探偵なら、おカネになることなら、なんでも引き受ける。だが、あなたは違う」
「私も、おカネは欲しいですけど、意味のないことをしても仕方がないですからね」
和香が照れたように微笑むと、桜井は上体を乗り出してきた。
「上野さんは、夏川さんになら、なにを打ち明けても大丈夫だと言ってましたし、あなたの人柄もよくわかりました。実は、サヤカには秘密がありましてね。不安になってきたのは、そのためなんです。これからの話は、極秘にお願いしたいんですが」
「その点は、ご信用下さい。依頼人の秘密は絶対に守るのが、私の信条ですから」
「そうおっしゃってもらえると、安心して話ができますが……」

桜井は、和香の顔を見つめ、思い切ったように言った。

「サヤカの母親は、犯罪者なんです。ある事件を起こし、獄中で生んだ子がサヤカなんです。その事件というのは、殺人事件ですが、詳しいことは、この調査には関係ないんで省略します。つまりサヤカは殺人犯の娘なんです」

和香の脳裏に、テレビや週刊誌で何度か見たことがある、火野サヤカの清純な笑顔が浮かんだ。あのサヤカが殺人犯の娘だったとは！　和香は、驚きを抑えて言った。

「すると、こういうことですね？　山田という男は、その事実を知って恐喝しようとしているんですね？」

「タレント生命に関わる重大な秘密、と言ってるんですから、それに違いないでしょう。ほかに秘密などなにもないですからね。だから、いったん、突っ撥ねたものの、不安で仕方がないんです」

「母親のことを知っている人は、何人か、いるんですか？」

「知っているのは、サヤカを育てた水上夫婦と私だけなんです」

桜井は、はっきりとそう言ってから、続けた。

「そこのところは、もう少し、詳しく説明しないとわかってもらえないと思います。こういうことなんです。

サヤカの母親の兄さんで、水上省三という人がいるんです。二十一年前、母親は、獄中でサヤカを生むと間もなく、死んでしまったんです。それで、兄さんが養女として、サヤカを引き取ったんです。

水上夫婦は、広島県庄原市に住んでまして、そこでサヤカを高校までいかせたんです。だが、サヤカは一年で中退して上京し、私の知人がやってるタレント学校に入り、勉強してたんです。

私は偶然、彼女をひと目見て、これは掘り出しものだと直感し、うちで育てる決心をしたんです。そ

れで、水上さんに会いにいきました。
それが四年前、サヤカが十七歳の時です。そのころ、水上さんは奥さんを亡くし、自分も腎臓を患って入院してましてね。精神的にも経済的にも、行き詰まっていました。
私がサヤカを預かりたいと言いますと、自分はいつまで生きられるかわからないので、あんたにすべて任せる、と言ったんです。私は独身主義で、将来も結婚する気はありませんし、それで水上さんに、いっそ養女にもらえないか、と言いますと、承知してくれました。
サヤカにも、了解を取りました。サヤカは、すでに、水上さんが実の父親ではないと知っていたようでした。それが、家を出て上京した動機の一つにもなっていたようです。
だから、割合、あっさりと私の養女になって、芸能界で生きていくことを承知してくれたんです。もちろん、水上さんには、これまでの養育費として、相当のカネを払いました。
その代わり、今後、サヤカとは、親子の付き合いはやめてもらうことにしました。直接、会わないことにして、年一回、サヤカの誕生日にだけ、電話で話すという約束にしたんです。
なんだか、人身売買みたいな話になりましたが、芸能界の商売のネタは、人間なんですからね。こんなことは、とくに珍しくはないんです。
その時、水上さんから、養女に出す理由として、出生の秘密を聞いたんです。サヤカの本名は、水上恵子なんですが、水上さんは、こう言いました。
『恵子が有名になると、マスコミが身元をほじくる。私の養女になってるから、実の親のことに興味を持たれ、殺人犯の娘だということがわかるかもしれない。
そんなことになるより、桜井さんの養女にしておけば、両親は私たちで、娘の将来を思って養女に出したと言えば、ワンクッションおいた形になって、

それ以上遡って、調べられることはないだろう。恵子が幸せになれさえすれば、だれの養女になっても同じことですからね』

そんな経緯で、サヤカは私の養女になったんですが、本人は、母親は未婚の母で、サヤカを生むと間もなく病死した、と思っているはずです。その後、サヤカには、歌、演技、踊りなどの基礎的な指導はもちろん、家庭教師を付けて一般教養も勉強させ、いま、立派なタレントに成長したということなんです」

「そうなると、サヤカさんの過去を知ってるのは、社長さんと水上省三さんだけ、ということになりますわね？」

「そういうことなんですが……」

「山田と名乗った男は、水上さんだとは考えられませんか？」

和香の質問に、桜井は首をかしげた。

「サヤカの秘密と言えば、母親のことしかないし、それを知っているのは、私と、奥さんは亡くなってしまったから、水上さんだけだ。そうなると、水上さんが電話の主だと考えられないこともないが、私には、水上さんの人柄から言って、そうとは思えないんです。

四年前、水上さんが私にサヤカを預けたのも、カネが必要だったこともあったかもしれないが、サヤカの将来を思っての決断だったと思う。だから、水上さんがいまになって、そんなことをするなんて、考えられないんですがね」

桜井は、番茶をひと口飲んでから、続けた。

「ひとつ、考えられるのは、なにかのことで、水上さんがうっかり秘密をだれかに喋ったという場合ですね。水上さんしか知らないことを、山田が知っているとすれば、水上さんから聞いたとしか考えられません。

それで、すぐに会って、事情を聞きたいと思い、電話してみたんですが、その電話は使われていない

と言うんです。いままでの住所はわかってますが、どこかに引っ越した可能性は大きい。
サヤカにも聞いてみましたが、水上さんからの連絡は、去年の春、誕生日にかかってきた電話が最後で、その後は連絡はない、今年の誕生日は、かからなかったと言うんです。もちろん、転居先も知りません。
手紙を出してみるか、市役所に問い合わせてみるという手もありますが、急に不安が高まってきて、そんなのんびりしたことはしてられない気持ちなんです。それで、至急、現地にとんで、水上さんの居所を捜して欲しいんです」
「わかりました。早速、やってみましょう。ですが、私の仕事は、水上さんの所在を確認してご連絡するというところまでですから」
「わかっています。そのあとは、また、考えましょう」
「いまわかっている庄原市の地番は、どうなんですか？」
桜井は、背広の内ポケットから手紙を取り出すと、それを見ながら言った。
「広島県庄原市本町××××の二です」
番地をメモしてから、和香は聞いた。
「水上省三さんの写真はありませんか？　本人を確認するために必要なんですが」
「写真はないですね」
「じゃ、容姿、年齢、それに、履歴などを教えて下さい」
「年は四年前、四十八歳と言ってましたから、現在、五十二歳になるはずです。容姿と言っても、とくに特徴はないですが、中肉中背で、色は浅黒く……、そうだ、鼻の脇にかなり大きなホクロがありました。履歴は、庄原市の生まれで、親のあとを継いでお茶屋さんをやってました。いま言った住所は、その店なんです」
「店の名前は？」

「水上園でしたね」
和香は、手帳を閉じると言った。
「では、明朝、庄原にいってきます。すぐに移転先がわかるかどうか、それはいってみなければ、なんとも言えませんが、その後の行動は、電話でご相談しますわ」
「わかりました。ここ二、三日は、東京にいますので、オフィスか自宅に電話して下さい。時間はいつでもかまいませんから」
桜井は、自宅の番号を告げた。和香は、ショルダーバッグから、調査依頼カードを取り出した。
「これに、一応、必要事項を記入していただきたいんですが」
桜井は受け取ると、紙面を一瞥してから言った。
「できれば、こんな書類なしに、お願いしたいんですがね」
桜井の言葉には一理あった。捜索の相手は水上省三だが、その背景には火野サヤカの秘密がある。だから、今回、調査を依頼したことを記録に残したくないのだ。
「わかりました。じゃ、内容は、私のほうで適当に書いておきます」
桜井はうなずくとソファを立ち、窓際の大机にいった。机の上の封筒を取り、もとの位置に戻ってくると、封筒をテーブルに置いた。
「三十万、入っています。着手金として受け取って下さい」
和香は礼を言うと、バッグから領収書綴りを取り出した。

夏川調査事務所は、渋谷の繁華街を見下ろす貸しビルの六階にある。和香が六本木のペガサス・プロを出て、愛車のワインレッドのセリカを駆って戻ってきたのは、もう午後五時に近かった。
オフィスは、八畳ほどの部屋が二つ、縦に並んだ恰好になっている。手前の部屋が応接室、奥が事務

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com